

形態統語理論における削除現象の取り扱いについて

—日本語の右方節点繰上げ構文を中心に—

田川 拓海[†] (筑波大学大学院)

key-words: 削除(deletion), 右方節点繰上げ(Right Node Raising), Contrastive Focus

0. はじめに

(1) 本発表の目的

日本語における右方節点繰上げ構文(Right Node Raising Construction)と考えられる現象について、その性質を記述し、整理する。また、それが形式的な(形態)統語理論においてどのように分析されるのか、検討する。

1. 準備

1.1. 様々なタイプの削除と本発表での考察対象

◆三原(1997)は、連用形接続節に時制辞が存在するということを示す際に、空所化(Gapping)という現象を用いている。

※以降、本発表では発音されない箇所を取り消し線(こんな感じ)で示す。

(2) a. John likes beer, and Mary ~~likes~~ wine.

b. 太郎はビールが ~~好きで~~、花子はワインが好きだ。

・本発表で取り扱うのは、(2b)のような現象である。

→しかし、確かに(2a)の英語の対応例は”Gapping”と呼ばれる現象であるが、対応しているように見える(2b)が”Gapping”だというのは正しい観察ではない¹(と考えている²)。

→”Gapping”とは、まさに文(節)中に空所(Gap)ができることを指している(=”medial deletion”(Wilder(1997)))。しかし、日本語では次のような例は許されない。

(3) *太郎は 教科書を 買い、花子は教科書を借りた。

(cf. 太郎は教科書を買い、花子は ~~教科書を~~ 借りた。)

[†] E-mail: takumidlit@gmail.com

¹ それによって三原(1997)の議論が成り立たなくなるわけではないと考えられる。三原(1997)の議論はこのタイプの文が厳密にどのような削除に該当するののかという点には本質的には影響を受けないからである。詳細は三原(1997)を参照。

² 日本語など、主要部後置言語(head final languages)にはそもそも、原理的に Gapping は存在しない(かもしれない)。(Kyle Johnson, p.c.)

- ◆削除（省略）に関する現象は空所化（Gapping）の他に、動詞句削除（VP-ellipsis）、名詞句削除（NP-ellipsis）、スルーシング（Sluicing）、右方節点繰上げ（Right Node Raising）などがある³。単純に省略箇所があり、意味が対応しているからといって同様の現象であるとは決定できない⁴。

(4) VP-ellipsis

- a. John might have seen someone, but Mary didn't see ~~someone~~.

NP-ellipsis

- b. John bought five apples, but Mary only bought two ~~apples~~.

Sluicing

- c. John bought something, but I don't know what ~~John bought~~.

(cf. 太郎が何かを買ったらしいが、私には何を ~~買った~~ かわからない。)

Right Node Raising

- d. I think John ~~likes Beethoven~~ and you think Mary likes Beethoven.

・削除現象は、その種類によって分析のされ方が異なることもしばしばである。日本語の例（(2b)）がどのような性質を持っているのかというのは、丁寧な観察を元に検証する必要がある。

2. 観察

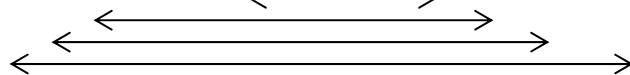
2.1. Right Node Raising Construction

- ◆(4)との比較という観点からは、本発表で取り扱っているタイプは、右方節点繰上げ構文(Right Node Raising Construction: RNR)に最も近いと考えられる。

(5) Right Node Raising の特徴

- a. 等位接続の前件にしか適用できない⁵。
*太郎はりんごが好きで、花子はなしが ~~好きだ~~。
b. 等位接続の前件の右端にしか適用できない。
=medial deletion はできない。(3)参照。
c. 端であれば、構成素（constituent）を成していなくても削除できる。
太郎は次郎が ~~花子を殺した~~と思、次郎は太郎が花子を殺したと思つた⁶。

[VP [CP [TP 太郎が [VP ~~花子を殺し~~] た] と] と思]



※構成素しか削除できないのであれば、どれかの矢印の範囲に等しく適用されなければならない。

³ 英語には他にも Pseudogapping という現象も存在する。

⁴ 日本語にも VP-ellipsis が存在するという議論は Otani and Whitman(1991)を、その反論としては Hoji(1998)を参照。両者の簡単なまとめが石居(2003)にある。日本語のスルーシングに関しては西垣内(1999)などを参照されたい。さらに、日本語の削除現象に関するより大きな理論的観点からの分析として有元・村杉(2005)も参照。

⁵ (4)で挙げた VP-ellipsis, NP-ellipsis, Sluicing などは前件・後件どちらにも適用できることが知られている (Wilder(1997))。

⁶ 日本語ではその語順の特性から、常に前件の述語を含む部分を削除することが多い。この場合、音声化されていない部分の形態（活用形）を決定するのは非常に困難である。本発表ではできるだけ連用形に統一するが、削除されていない文との比較の都合上、テ形を用いることもある。

→ト節外の動詞まで削除されているのに、ト節内の主語「太郎」は残されていることが問題。

2.2. 英語、ドイツ語の RNR との相違点

- (6) English/German では、複合語の一部であっても削除が可能であるが、日本語では複合述語の一部は削除できない。

English

a. Your theory undergenerates and my theory overgenerates. (Wilder(1997): 83)

German

b. Philip säte Frühlingsblumen und Herbstblumen.

Philip sowed springtime flower and autumn flower.

(Féry and Hartmann(2005): 73)

c. *太郎はケーキを食べ 始め、花子はワインを飲み始めた。

- ・(6c)のように、比較的各構成要素が統語的に独立性の高い統語的複合動詞（影山(1993)）でさえ、その一部を削除することはできない。
→さらに、各種接続マーカー（いわゆる接続助詞）類や、補文をとると考えられる述語も、削除することはできない。

(7) 複合述語（モダリティ述語など）

a. *太郎は走り ~~たくて~~、花子は歩きたかった。

(cf. 太郎は午前中に ~~走りたくて~~、花子は夕方走りたかった。)

b. *本当は、部長が挨拶をする ~~はずで~~、課長が司会をするはずだった。

(cf. 本当は、部長が挨拶を ~~するはずで~~、課長が司会をするはずだった。)

c. *太郎は自分の論文を誉め ~~られ~~、花子は自分の論文を批判された。

(cf. 太郎は論文を ~~誉められ~~、花子は口頭発表を誉められた。)

接続マーカー

d. *太郎はご飯を食べ ~~ながらテレビを見~~、花子は音楽を聴きながらテレビを見た。

(cf. 太郎はご飯を食べながら ~~テレビを見~~、花子は音楽を聴きながらテレビを見た。)

e. *太郎はセクハラをした ~~ためにクビになり~~、花子は横領がばれたためにクビになった。

(cf. 太郎はセクハラを ~~見つかったために~~、花子は横領を見つかったためにクビになった。)

◆このような削除現象には、大きく分けて次の四つのアプローチ（+それらの複合型）が存在する。

①共通の要素を移動させる: ATB movement

②syntax での削除

③LF で足りない部分を補うためにもう一方からコピーする

④PF での削除

→Right Node Raising は(5c)の特性が大きな特徴で、統語的な性質より、むしろ線形順序 (linear order) に sensitive であり、④の PF deletion のアプローチが提案されることが多い⁷ (Wilder(1997), Féry and Hartmann(2005))。

⁷ 文字通り、“Right Node Raising”という名称は最初、移動現象として分析されていた名残である。定着してしまっているので、現在はどのような分析をとる研究者もこの名称で呼んでいる。

→しかし、VP-ellipsis と同じタイプの分析を適用させる、という研究もある (Ha(2007))。Ha(2007) の分析は syntax における素性の存在をきっかけとした PF における操作を仮定するもので、②と④の複合型だと言える。

◆日本語の複合述語は、一つの Prosodic Word を形成する (≒語アクセントを共有する) と考えれば、Right Node Raising はある特定の phonological unit には基本的に介入できないので (Wilder(1997): 86-87)、説明されるかもしれない⁸。しかし、「ため」などはそのうちに過去の「た」を含むことができ、音韻論的にも独立していると考えられる。

→(minimal) minor phrase (Poser(1984)) に介入できない。

(8) 太郎は前夫統領派で、花子は現大統領派だ。

・「前」、「現」などの minor phrase を保持するタイプの接頭辞 (Aoyagi prefix (Poser(1980))) であれば、複合語であってもその付加した基体の削除が可能である。

・minor phrase に付加する間投用法の「ね」(田川(2007)) と分布が似ている。

(9) 太郎は (ね) セクハラを (ね) した (*ね) ために (ね) クビに (ね) なって (ね)、...

3. Puzzle: Against PF deletion analysis

3.1. ハ句の分布

◆しかし、PF deletion 分析では単純には分析できないと考えられる現象もある。

(10) a. ??~*太郎は父親には ~~プレゼント~~をあげ、次郎も母親にはプレゼントをあげた。

b. 太郎は父親にはネクタイを ~~あげ~~、次郎も母親にはハンカチをあげた。

c. 太郎は父親に ~~プレゼント~~をあげ、次郎も母親にはプレゼントをあげた。

・(10a-c)の対比に見られるように、ハ句が前件の右端に現れると許容度が落ちる。

→これは、単純な PF deletion 分析では説明できない。削除が無い場合や、ただ「は」が現れていない以外は同じ文 ((10c)) も許容度は落ちない。

3.2. とりたて詞

◆ちなみに、他のとりたて詞はハと違い、端に出られるものが多い。

→focus particle だからダメ、というわけでもない。

(11) a. 太郎はビール も(累加)/さえ 飲めず、花子は梅酒 も/さえ 飲めなかった。

b. 太郎は父親にだけ ~~プレゼント~~をあげ、次郎は母親にだけプレゼントをあげた。

c. 太郎は次郎こそ 会長にふさわしいと思っていて、

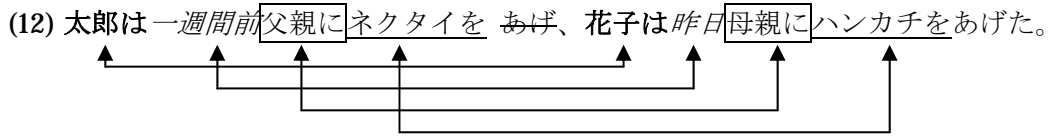
次郎は太郎こそ 会長にふさわしいと思っている。

d. 太郎はりんごばかり ~~毎日食べていて~~、花子はなしばかり毎日食べている。

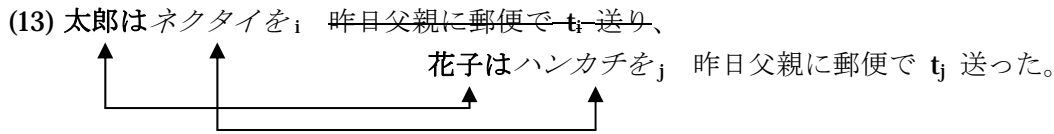
⁸ 「ながら」など、連用形接続の接続マーカーもアクセントを動词语幹と共有する。

3.3. 分析の可能性: Focus movement & Deletion

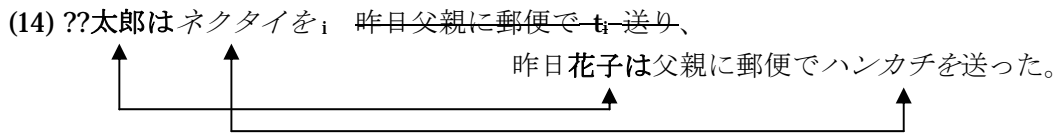
◆ここでは、これまで見てきた削除構文が(Contrastive) Focus と関連していることに着目し、統語論的な分析の可能性を探る⁹。



- ・(12)に示したように、同一の部分は削除されるのだが、残された部分は後件のそれぞれの要素と対比的な関係を持っている。
→また、この構文では前件の右端がまとめて削除されるために、対比的になっている要素は、(scrambling されたように) 基本的な語順から左に移動していると考えられる場合がある。



- ・さらに、ここまで見てきた例からもわかるが、前件だけでなく、後件も前件と対比的な関係にある要素は前方に移動していなければならない。



(15) *太郎が 母親にプレゼントをあげ、花子も母親にプレゼントをあげた。
(cf. 太郎と花子が母親にプレゼントをあげた。)

- ・この現象が、contrastive focus を表すということは、上のような例からもわかる。
→この削除は要素が一つになってしまうような場合には許容されない。(対比する要素を明示する) contrastive focus では、①対比させられる要素、②対比される内容、の最低二つの要素が必要とされるので、その制限によるものだと考えられる。

◆仮説: Overt Focus Movement & Deletion

- 日本語にも顕在的な Focus Movement が存在し、(contrastive) focus を受ける要素が移動する¹⁰。Foc⁰ 以下にある構造は発音されなくても良い (Ha(2007), cf. Wilder(1997)).
→統語分析と PF における削除 (実際には発音の不許可) の複合分析。

◆上の仮説はハの分布を説明できるのか?

- 現段階では難しい。英語などの RNR の前件の右端の要素が必ず contrastive になる (Ha(2006))

⁹ 実際に、RNR に対する分析では contrastive focus をどう取り扱うかということが重要な問題とされることが多い (Hartman(2000), Ha(2006)など)。

¹⁰ 日本語における Focus Movement に関しては Nishioka(2000), Yanagida(2005)などを参照。

ことと関係しているのかもしれない。

4. さらなる現象：助詞の削除

◆この RNR においては、通常省略が不可能な助詞も現れなくて良い。

- (16) a. 太郎は 先生*(から) 辞書をもらった。
b. 太郎は先生から辞書をもらい、花子は父親から辞書をもらった。

→ところが、いくつか省略が不可能な助詞があるようである。

◆「と」

- (17) a. *太郎はコーヒーとケーキを注文し、花子は紅茶とケーキを注文した。
(→太郎はコーヒーを注文し、花子は紅茶とケーキを注文した。)
b. ?太郎はコーヒーとケーキを注文し、花子は紅茶とケーキを注文した。

・しかし、(17a)を許容する話者も存在する。

◆「や」「か」

- (18) a. *太郎はリンゴやなしが好きで、花子はイチゴやキウイが好きだ。
b. *太郎はリンゴやなしが好きで、花子はイチゴやキウイが好きだ。
c. *太郎はリンゴかなしが好きで、花子はイチゴかキウイが好きだ。
d. *太郎はリンゴかなしが好きで、花子はイチゴかキウイが好きだ。

・「や」「か」の場合は助詞が現れても現れなくても許容されない。

◆いずれも、名詞句を並列させる機能を持つ。

→日本語の等位構造、あるいは助詞の研究に何か新たな知見を与えられるか。

◆他にも、何らかのテストに応用できるかもしれない。

REFERENCES

有元将剛・村杉恵子(2005)『束縛と削除』研究社

Féry, Caroline and Katharina Hartmann(2005) "The Focus and Prosodic Structure of German: Right Node Raising and Gapping," *The Linguistic Review* 22, pp.69-116

Ha, Seungwan(2006) "Contrastive focus: Licensor for Right Node Raising," *NELS* 37. University of Massachusetts, Amherst.

Ha, Seungwan(2007) "An ellipsis account of Right Node Raising in Korean," *WAFJL* 3.

Hartmann, Katharina(2000) *Right Node Raising and gapping: Interface condition on prosodic deletion*. Amsterdam: John Benjamins.

Hoji, Hajime(1998) "Formal Dependency, Organization of Grammar," *Japanese/Korean Linguistics* 7, 649-677.

- 石居康男(2003)「第五章 主要部移動」『英語から日本語を見る』 pp.149-196 研究社
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』 ひつじ書房
- 三原健一(1997)「連用形の時制指定について」『日本語科学』 1 pp.25-36
- 西垣内泰介(1999)『論理構造と文法理論—日英語の WH 現象—』 くろしお出版
- Nishioka, Nobuaki(2000) “Japanese Negative Polarity Items *wh-MO* and *XP-sika* Phrases: Another Overt Movement Analysis in Terms of Feature-Checking,” *Syntactic and Functional Explorations: In Honor of Susumu Kuno*. Ken’ichi Takami, Akio Kamio and John Whitman (ed.), pp.157-184
- Otani, Kazuyo and John Whitman(1991) “V-Raising and VP-Ellipsis,” *Linguistic Inquiry* 22, pp.3345-358.
- Poser, William J.(1980) “Word-Internal Phrase Boundaries in Japanese,” *The Phonology-syntax Connection*. Sharon Inkelas and Draga Zec (eds.), pp.279-288, The University Chicago Press.
- Poser, William J.(1984) The phonetic and phonology of tone and intonation in Japanese. Ph.D. dissertation, MIT.
- 田川拓海(2007)「統語論と音韻論の節点—間投用法の「ね」の認可条件—」 ms. 大阪外国語大学.
- Wilder, Chris(1997) “Some Properties of Ellipsis in Coordination,” *Studies on Universal Grammar and Typological Variation*. Artemis Alexiadou and T. Alan Hall (ed.), pp.59-107, John Benjamins Pub Co.
- Yanagida, Yuko(2005) *The Syntax of FOCUS and WH-Question in Japanese: A Cross Linguistic Perspective*. HITUZI SYOBO Publishing.